

エコフェミニズムの超克

環境と女性／ジェンダーとサステナビリティ

立教大学社会学部／
大学院21世紀社会デザイン研究科教授
萩原なつ子
2014. 11. 1

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

1



2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

2

私たちの子どもたち、そのまた子どもたち、そしてその孫たちや曾孫たちの生きる時代に、地球の表面は、どのような状態になっているのでしょうか。

海は？河は？森林は？野原は？砂漠は？
土壌は？地球をとりかこむ大気は？
そして街は？

この本の著者、萩原なつ子さんは、このような問を胸に抱きながら、勉強を続けている人です。その問いはつまるところ、「未来の子供たちのために、今、私は、何ができるのか」ということになっています。「この本によせて」原ひろ子

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

3

用語の定義 (内閣府男女共同参画局)

- ①ジェンダーの視点: 社会的・文化的に形成された性別(ジェンダー)が性差別、性別による固定的役割分担、偏見等につながっている場合もあり、これらが社会的に作られたものであることを意識していこうとする視点
- ②女性の視点: 現在の社会におけるジェンダー不平等により、方針決定に女性の意見が反映されないことが多い。社会で十分に生かされていない女性が持つ経験に基づく視点。

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

4

エコロジー(Ecology)の語源

OIKOS(棲む家)+LOGY(学問)

The Universal House = 環境

➤ Oekologie→Oicology→Ecology

➤ エルンスト・ヘッケル(1838-1919)

「生物をその相互の関係および非生物的環境との関係において研究する学問」として、1866年に提唱

OIKOSを語源にもつ言葉は？

Ecology と Economy

20世紀は環境と経済のうち、経済が優先

⇒ 自然環境の搾取と破壊

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

5

元祖ESD エコフェミニズムの先駆者

➤ エレン・リチャーズ・スワロー(1842~1911)

自然環境と共生しうる生活・経済社会の形成をめざすための学際的科学、社会運動としてのエコロジー
1892年11月30日

Ecologyの命名式(ボストン)

人々が環境と調和して生きるための知識を身につけるための科学

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

6

「豊かな生活」よりも「正しい生活」

人間が全地球の支配者であるという考え方に私たちはすっかりなじんでしまっているようです。文明が高度になればなるほど、良識は衰退し日常生活に応用される科学も減少していくように見えます。これからはエコロジーを私たちの日常科学にしましょう。それをすべての応用科学のうち、健康で幸福な生活がその上に打ち立てられるべき諸原理を教える最も価値ある科学にしようではありませんか」(エレン・スワロー、1892年)

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

7

環境教育／ESDの提唱

今日もっとも緊急に必要なのは、環境と調和して生きることのできる人々を明日のためにつくりだす教育である。

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

8

元祖ESD エコフェミニズムの先駆者

- レイチェル・カーソン『沈黙の春』(1962年)
- 「・・・自然は沈黙した。薄気味悪い。鳥たちは、どこへ行ってしまったのか。みんな不思議に思い、不吉な予感におびえた。裏庭の餌箱は空っぽだった。ああ、鳥がいたと思っても、死にかけていた。ぶるぶるからだをふるわせ、飛ぶこともできなかった。春がきたが、沈黙の春だった！」

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

9

二人の女性科学者の思い

- 自然を支配するという科学と技術の発展がいかに環境を破壊し、ひいては人類の危機につながるかを警告。
- 人間の自然に対する奢り、傲慢さを憂い、環境と調和しうる生き方を提唱

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

10

環境と女性／ジェンダー

- ①環境破壊や環境問題解決のための政策が男性と女性に与える影響(社会・経済的、健康被害等)やジェンダー・バイアスについて検討する
- ②環境保全者としての女性の経験や知識を評価し、環境保全活動における女性の貢献を認めること
- ③環境保全活動の現場や環境政策の決定の場への女性の参画の積極的な推進

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

11

環境と女性／ジェンダー

- 「女性と男性は異なる社会的位置に置かれており、ジェンダーは人間と自然界との関係性に深い影響を与えるため、両者は環境に関して異なるニーズを有しており、また環境問題も異なる形で経験する。したがって環境問題の解決にはジェンダー分析が欠かせない」

(メアリー・メラー)

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

12

環境と女性／ジェンダー

- 女性たちの多くは水、食料、燃料の調達、家族の健康管理、そして出産・育児という命にかかわるジェンダー役割を担っている。その役割ゆえ、環境破壊の影響を受けやすく、わずかな環境の異変にも敏感になるような状況に置かれている。
- 「人間の生命を産み、生計を維持する女性のジェンダー役割は、女性と環境に対する破壊的インパクトが子どもの状態にたいする否定的インパクトにまで広がることを意味する」(ヴァンダナ・シヴァ)

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

13

環境と女性／ジェンダー

- エコロジー的破壊による新たな負荷が生命や生命を維持するシステムの減退を余儀なくさせる。そのことがたとえ一人であっても環境破壊に立ち向かうために行動を起こしてきたのである。ところが女性は環境保全、保護や生態系の管理者として重要な役割を担っているにもかかわらず、社会的にはほとんど認知されず、長らく不可視化、つまり存在しているのに存在していないものとする“見えない存在”とされてきた。

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

14

見えない存在の女性を可視化させる エコフェミニズムの誕生

- 1974年 フランスのフラソワーズ・デュボンヌが「エコフェミニズム」を造語。
『フェミニズムが死か』
- 「惑星における人間の生存を賭けたエコロジー革命を起こす女の可能性」

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

15

エコフェミニズム

- ①自然環境の搾取と女性の男性による支配を正当化した家父長制的資本主義を批判
- 女性が社会的支配によって悩まされているときには、地球上の多くの生命が同様に脅かされているというメッセージ
- ②第3世界の搾取と抑圧に関わる開発問題と環境破壊の問題を重視
- 人間社会の不公正と環境破壊のつながりを追及する実践であり、思想

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

16

エコフェミニズムとは

環境と女性／ジェンダーの関係性について唯一、焦点化してきたのがエコフェミニズム ⇒可視化

- ①環境危機とジェンダー不平等の相互関連を分析する視点(例:人口問題と地球破壊)
- ②新たな支配構造を生み出すものに対する批判的視点(例:新版エコ植民地主義)
- ③女性が自然の特権的な理解者であり未来の救世主であると解される場合に生じる逆転現象に対する批判を避ける視点(例:女性は自然に近いから、女性こそが環境問題を解決できる)

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

17

エコフェミニズムの目的

- 新しいパラダイムの構築
- ジェンダー的公正と環境的公正の同時達成
- 「人間と地球の関係をどう捉えなおすか、人間が、自然を破壊・搾取することなく、どう関係を構築するか、男女間においても男性が女性を抑圧・搾取することなく、どう関係を作っていくのか。」
- 「女性でなくても、今あるシステムの非人間的な側面はわかる。支配・搾取・抑圧にどう立ちむかっていくのかに論点がある。」(マリア・ミース)

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

18

エコフェミニズムの背景

- エコロジー運動とフェミニズム運動を背景としており、女性たちが目の前にある環境問題や女性差別を解決するために起こした抗議行動や政治的活動から生まれた思想である。
- 1960年代以降、生活レベルに最も近い人々の運動・闘争から始まり、それらを基盤に、欧米を中心に理論が形成された。
- 運動・闘争：生命の源を守るために、子どもたち、動植物などすべての生物が生きていくことができるようにするための政治的実践

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

19

エコフェミニズムの主な政治的実践

- 1980年 第2回世界女性会議「エコフェミ宣言」
- 1980年 「女性と地球の生命会議」
- 1985年 第3回世界女性会議「ナイロビ将来戦略」
- 1986年 チェルノブイリ原発事故⇒反原発運動
- 1991年 「健康な地球をつくるための世界女性会議」
女性のアクション・アジェンダ21
- 1992年 「地球環境開発会議」(リオサミット)
アクション・アジェンダ21第24章
- 1995年 「北京行動綱領」
- 2012年 リオ+20 女性メジャーグループの活動

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

20

エコフェミニズムの政治的実践

- 2012年 国連持続可能な開発会議(リオ+20)
- 女性メジャーグループWMGのアンケート調査
- 成果文書に対する最終意見「私たちの欲する未来」
- ①リプロダクティブ・ライツが入らず、人権が弱まった
- ②健康な環境に向けての権利の否定一原子力、鉱業の健康や環境に及ぼす害が触れられていない
- ③自然資源へのアクセスと管理に関する女性権利を保障する具体的な手段が含まれていない
- ④法的規制を伴う予防原則に則って実施されない限り、グリーン経済はグリーンウォッシュにすぎない
- ⑤地域分散型の再生産エネルギーシステムへ転換するための資金源の確保

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

21

持続可能な社会へ向けて

持続可能な発展(開発)の定義

- 将来世代への配慮
- 社会的公正
- 経済と環境の調和

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

22

エコフェミニズムとサステナビリティ

- エコフェミニズムにおけるサステナビリティは、利潤よりも生命を優先し、環境を重視し、地域、ローカリティを重視する「生態学的サステナビリティ」。
- 自然とつながっている暮らしを大事に、破壊、暴力、支配、争い、差別といった言葉とは無縁の社会を創ること。そのために私たちは何をすべきかを考え、自分で判断し、行動していくことが求められている。

2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

23

未来世代のために



- ・彼らが生きる未来社会を考えると
「暮らしやすい社会」をつくること
彼らが自ら育つ環境をつくること



2014/11/1

Natsuko Hagiwara©

24